呉秀三・森鷗外の統計研究に寄せて

丸山博

簡単に申しますと、私がここへ出てお話する必要がないぐらいです。今から約二〇年前に「医学史研究会」で私が、森鷗外と呉秀三の手によって世に出されたエステルレン Fr. Oesterlen の『医学統計論』の問題を提起したところ、それがものの見事に、今の吉岡さんや岡田さんの手でなしとげられた、という事実があるわけです。[1][2][4][8][9][10]

この事につきましては、話をしておればそれこそ切りがありませんが、それは明治二二年（一八八九年）、森鷗外は二七歳、呉秀三は二三歳、富士川游二三歳の頃の事なのです。当時の日本の医学界におきましては、過去を取扱うこと・歴史による研究法、これがまだ定着していないどころか、問題にもなっていない時期だったんです。実験医学はそろそろ定着しかけていた。現在においては、統計的研究も医学研究の分野においてはある地位を占めておりますが、当時においては統計的研究などというものは自然科学の研究方法としてはまだまだ定着しておらない。そういう時期に統計的方法をいちはやくわがものにされた呉秀三先生、しかも学生時代にエステルレンを翻訳されたということ、そしてそれへの序文を書かれたのが森鷗外先生だったのであります。

私はこれを医学史研究会の時に教えていただきまして、それからとうとう鷗外の統計研究の分野に深入りせざるをえなくなったのであります。[3][5][6] 呉秀三先生の精神病学の方の仕事は、これはもう有名でありましょう。統計の方の仕事はあまり有名でないということですが、時流に先んじてといいますか、学生のときにエステルレンを翻訳されたという事実、これはどうしても埋没させることはできません。しかし、これを呉文聰さんの遺族の方、呉文炳さんにうかがっても、あまり

重視されていない、「そういうことがあったのかねえ」というようなお話であったのであります。[1] また、呉先生が精神科教室あたりに残された蔵書のなかにそれがあるかと思って調べていただいたが、やはりなかったのです。[1]

『医学統計論』は、このように薄い一冊の翻訳本であります。その重要性が認められぬままに来たという事実に対し、私自身少し統計的なことをやっておったものですから、私達はこの事実を今の時点においてどう理解すべきか、考えるところがあったわけです。[1][2][3][5][6]

当時の国内における統計事情に二、三追加しておきたい事があります。杉亨二、呉文聰、これは一般統計家でございます。内務省衛生局の統計課は一八八〇年（明治一三年）に新設されました。その時の統計課長が永井久一郎、永井荷風のお父さんです。このことは岡田さんの「森林太郎〝統計論争〟の背景」ではふれていないので、追加しておきます。[9][11]

つぎの問題点は、エステルレンの『メディツィニシェ・スタチスチック』、[1][6] これは一八七四年のもので、そのまえにエッチンゲン Alex. v. Oettingen の『モラルスタチスチック』という本の第二版が一八七四年に出ておるわけです。これはなかなか膨大な本で、これも全部ではありませんが一部分日本語に翻訳されてはおります。[12] そのモラルスタチスチックのなかにヴァイタル・スタチスチックスであるとかメディツィニシェ・スタチスチックであるとかが含まれており、エッチンゲンにつづくエステルレンの『メディツィニシェ・スタチスチック』で医学統計がいまから約一〇〇年前に独立した、と考えられてしかるべきではないか。そのつぎ一九〇〇年代にはいりますと、ご存じのプリンツィング Prinzing のメディツィニシェ・スタチスチックのハンドブーフ（一九〇九年）があるわけです。

エッチンゲンの『モラルスタチスチック』につきましては、私は別に問題提起をしました。[3][6] 国内における鷗外先生・呉秀三先生を中心とする医学統計の発展をめぐる情況につき岡田さんが研究されたと丁度同じように、いま会津短大の内海健寿さんが一九七〇年代からエッチンゲンの問題にとりくんでおります。[8][9][10][13][14][15] そのことを一寸紹介させていただきます。

このエッチンゲンの道徳統計は、キリスト教的道徳哲学に本題があるわけです。このことをなぜ私がここで問題にする

か、単刀直入に結論を先に言ってしまいますと、私は、インドの医学アーユルヴェーダ Āyurveda とニーチェ[16]、ニーチェと森鷗外という所にいまぶつかっています。そしてそのなかで、「モラル」という問題と「道徳」、「宗教」、「科学」という問題が頭のなかでトグロをまいているわけです。

ここで一寸内海論文[13]を読みますが、このエッチンゲンによると、「人間は自由にして責任をもつ存在ではあるが、人間は事実関係によって社会に結合されている。したがって、その意味において社会が考察されなければならない。社会物理学ではなくして、社会倫理学が要求される。この社会倫理学は、経験的基礎の上にたつ道徳統計の援助を必要とするのである」((13)の七六ページ)。

エッチンゲンはその研究過程において唯物論との協力関係の可能性を指摘して、その序文のなかでつぎのように言っております。「われわれの精神科学に従事する者たちは唯物論に大いに感謝しなければならない。唯物論はいやおうなしに、われわれに現実主義的に考えることを教えた。そしてまた、一大世界である精神の世界は、関連のあるただ異なった性質の実存であるとの認識を、唯物論からわれわれが学ぼうと欲したならば、その奉仕はお互いに役立つものとなるであろう」((13)の七六ページ)というような意味合いにおいて、道徳統計の意義づけをしています。

研究対象については、人口動態統計、経済統計、政治統計などの極めて範囲の広いものを指摘しておる。そしてその道徳統計の担当すべきかなりの重要性を示唆している。

「人の社会生活上の現象、道徳上の善悪批判の目的となる所のものを数量的に研究するもの、それを道徳統計となす。されば、貯金であるとか、寄付であるとか、他人の危難の救助のごとく善事として認められるもの、並びに犯罪のごとく悪事として認められるものは、皆道徳統計の研究範囲に属す」と。「加えて、男女の関係、自殺、私生児等の研究などの重要な部分を形成するものをもって、人口動態統計は道徳統計のために多くの材料を供給する。経済統計もあるいは破産に関し、あるいはアルコール飲酒などは奢侈品の消費量などに関し幾多の材料を供給し、政治統計もまた社会党その他各

政党の勢力の消長を示し、したがって人心の帰趨を明らかにする点において必要なる材料を提供するものなり。されば、道徳統計の管掌する範囲は極めて多く、その材料を得る手段がいかに多しとするも、完全なる道徳統計となることの至難の技なるは今日においても未だ甚だ幼稚たるを免がれず」（(13)の七七ページ）。これは一八六八年の段階であり、これらのことは一九〇六年（明治三九年）滝本美夫教授（東京高商）が紹介している論文の引用であります。

丁度その頃、さきの呉秀三訳『医学統計論』についで注目されねばならない富士川游先生の「医科統計学」が『医学中央雑誌』にのりました。[17] また東京・南江堂から『医科論理学』[18]という本が出版されました。これらはいずれもエステルレンの本を参照しておりますが、もうエッチンゲンの本は参照しておりません。もちろん、それだけではございません。その当時のヨーロッパの趨勢では、医学の一つは実験医学、もう一つは計数的医学（鷗外はこういっております）でありましたが、この計数的医学の方の問題点を、日本医学の発展途上におきまする一分野の価値判断につながる問題として、富士川先生はこのように提起されているのであります。[19]

そして、呉秀三・森鷗外・富士川游など、そういう方たちが期せずして、医学史研究の当時における新進気鋭といいますか、こういうまだ若い先生方によって日本に医学史の研究分野がつくりひらかれた。これは一考に値します。にもかかわらず、といっては天に唾するようなことになりそうでありまして、私たちの努力がまだ不十分なためか、医学の歴史的な、あるいは文化的な方面の研究分野が、日本の医学教育のなかにはまだ正当に位置づけられておらないのであります。そして、最初に申し上げました「モラル」という問題と「道徳」という問題について、東洋におきます考え方、あるいは西洋におきます考え方やその現状というようなことにつきましては、奇しくもと言ってよいと思いますが、実に鷗外が文学作品に取り上げており、また木下杢太郎の東北大学教授時代における「鷗外の会」の活動のうちに、私たちはそれを見ることが出来るわけです。[6][20]

そして、こういう発展のなかで、日本においても今盛んなっておりますライフサイエンスという学問分野の中で問題が

あると私は言うのです。[21] ライフサイエンスはまだ一〇〇年もたたない問題提起です。しかし、それより二五〇〇年も前に、もうすでに釋尊の時代、仏教の開祖であるゴータマ・シッタルタが新興宗教をうちだすその前後におきます、アーユルヴェーダ、これは直訳してしまえばライフサイエンスになってしまいます。その内容と言いますと、東洋思想が非常に大きな役割を果たしている、インドに発生したものですから。

このインドにおける釋尊を、医学の歴史を考える時には私たちは当然考えなければならないにもかかわらず、日本の医学界は中国どまりで、インドの医学までは手が及んでおらなかった。それではいけないと、私たちはアーユルヴェーダ研究をやりかけたわけです。まだ十数年しかたっておりませんが。アーユルヴェーダ、これは仏教以前のインドの科学、医学だと言ってよいのです。[21]

じつは偶然の機会だったのです。私は「道徳」の問題について、ニーチェの『道徳の系譜』をちょっと読んでみたのです。けれども、その時には気がつきませんでした。ついで、『この人を見よ』というのを読みましたら、(私の結論だけ申上げますが、) その中に「仏陀は生理学者だ、仏教は衛生学だ」、こういうことが書いてあり、病気の問題について、日本語訳で怨恨、恨みつらみということが書いてある。これがまさに疾病の根幹的な問題であるという指摘がある。これがどうも合点がいきませんで、調べてみましたら、原語はルサンチマン Ressentiment と書いてあり、ルサンチマンとは何だろうということに、この二、三カ月とりつかれております。[16] 一方にニーチェの一九世紀末におきます哲学的な活動があり、他方にエステルレンであるとかエッチンゲンであるとかの一九世紀末におきまする、いまから一〇〇年前の、学問的な、とくに統計学的な仕事がありますが、ニーチェの指摘したものは、今ちょっと読み上げましたエッチンゲンの道徳統計の研究の範囲であり対象であり、そしてその意味づけであります。[12][13][15]

こういう歴史的な一〇〇年前の事を、ただ一〇〇年前の事だとは言わずに、今の日本のこういう状況においてどういう意味を持っているか。方法の問題としての統計の問題、ヨーロッパ、とくにドイツの学問世界にあった問題は、今の時点

においても、もう一ぺん検討するのに決して古くはない、非常に新しい問題を私たちに投げ掛けているものと考えます。

丁度呉先生のお仕事が、今日本の現状にとって重要な示唆を与えておるということが、岡田さんあたりの研究によって明らかにされておるわけであります。呉先生の医学史の対象である人間の問題の身心医学的なものとして精神病もございましょう。[21]

そして今、この呉先生の没後五〇年になります。こういう機会に確かに、もう死んでなくなられてしまった先生の残された仕事、そのなかでも、あまり多くの人達には興味と関心とを持たれておらなかった、ある意味ではむしろ時代の風潮のなかで抹殺されたような仕事を、もう一度正しく理解していく必要があるのではないかと思います。

森鷗外の統計問題、それから呉秀三、このお二人の仕事から始まったことでありますが、ついにこんな所まで私は来た。話を長くしてはいけません。結論だけ申し上げました。皆さんの御批判をお願いします。

（昭和五七年三月二七日口演）

次に口演の素材の出典を示す参考文献を注記して、読者の便に供することにする。

（1）丸山博　統計学者・森鷗外とその周辺——鷗外をめぐる人と書を辿る。自然、第一八巻第一一号、七五—七七頁（一九六三）。

（2）丸山博　森林太郎と小島勝治——日本統計学史上の二人の業績（日本統計学会第三一回総会報告）。一九六三年度日本統計学会年報：五一—五四頁。

（3）丸山博　軍医森林太郎。科学と思想、第五号：五三—六三頁（一九七二）。

（4）丸山博　岡田・吉岡・長谷川論稿に寄せて。医学史研究、第四一号：四〇頁（一九七三）。

（5）丸山博　粟生一粒庵雑記（その一）——軍医森林太郎と医学統計。鷗外全集月報、第二八号：四—九頁（一九七四）。

（6）丸山博　森鷗外と医学。鷗外、第一六号：一—四三頁（一九七五）。

（7）岡田靖雄・吉岡真二・金子嗣郎・長谷川源助　呉秀三先生生誕一〇〇年祭をまえに。医学史研究、第一四号：一一—一三頁（一九六四）。

（8）岡田靖雄・吉岡真二・長谷川源助　呉秀三先生と周辺の人びと、とくに森鷗外および呉文總との関係をめぐって。医学史研

究、第四一号：三四―四〇頁（一九七三）。

(9) 岡田靖雄　森林太郎〝統計論争〟の背景。医学史研究、第四九号：一―一三頁（一九七八）。

(10) 岡田靖雄　戦前の精神科病院における死亡率。医学史研究、第五五号：一―七頁（一九八一）。

(11) 木村正文　わが国人口動態統計のはじまり――永井久一郎小伝。厚生の指標、第二八巻第一二号：三―一一頁（一九八一）。

(12) 岡松徑は「エッチンゲン氏のモラール・スタチスチック論」と題しエッチンゲン『モラル・スタチスチックス』（一八七四年第二版）の第一回訳文を『スタチスチック雑誌』第二巻第二一号（明治二〇年〔一八八七年〕一二月号）四八五―四八九頁にのせてから、同誌第三巻第二三号八六―九〇頁（明治二一年三月）、同第二四号一六四―一七一頁（同四月）、同第二八号三七一―三七六頁（同八月）、第四巻第三九号三三七―三四二頁（明治二二年七月）、同第四〇号三九七―四〇一頁（同八月）、同第四三号五三二―五三九頁（同一一月）、同第四四号五七五―五七九頁（一二月）、同第五巻第四六号六四―六九頁（明治二三年―二月）、同第五〇号二八八―二九一頁（同六月）、同第五一号三二三―三二六頁（同七月）、同第五二号三五六―三六一頁（同八月）、同第五三号四一二―四二〇頁（同九月）、同第五四号四六五―四七一頁（同一〇月）、同第五五号四九六―五〇五頁（同一一月）、第六巻第五八号七二―八一頁（明治二四年二月）、同第六五号四三三―四三八頁（同九月）、同第六七号五二八―五三〇頁（同一一月）と第一八回までで、未完のまま中絶したのか、あとは『統計学雑誌』の目次には見あたらず。訳されたのは原書の第二章第七節の途中、八一頁の中央までである。

ちなみに、この「モラール・スタチスチック編」を掲載した『スタチスチック雑誌』は創刊号を、その前身「表記学社」（明治九年、一八七六）改め「スタチスチック社」（明治一一年、一八七八）から明治一九年（一八八六）に創刊されて、巻号を重ねること六巻・六八号で明治二四年（一八九一）一二月でおわり、翌年正月から改名された「統計学社」の機関誌として『統計学雑誌』と改めたが、巻・号は『スタチスチック雑誌』からの巻号をひきついで、『統計学雑誌』の創刊号を第七巻六九号とした。

この改名・改称の前二年のこと、明治二二年（一八八九）二月の『東京医事新誌』第五六九号にのった森林太郎の論文「医学統計論ノ題言」に対して、スタチスチック社五月例会で同社幹事今井武夫の論評があり、それが『スタチスチック雑誌』第三七号に「統計に就て」となって掲載されてから、両者の間に、いわゆる統計論争がながながと続けられた、というイキサツがある。

このことについては岡田靖雄君の研究[9]があり、この岡田論文への私のコメントが、この口演はじめにエピソードとして追加

した、永井荷風の父永井久一郎のこと（一八八〇年四月、内務省衛生局に新設された統計課の課長に任ぜられた云云――荷風全集第二九巻附録年譜から）である。このコメントは一九七八年（昭和五三年）四月のことであった。ところがそれから三年後、この永井久一郎のことが、一九八一年『厚生の指標』昭和五六年一二月号に「わが国人口動態の統計のはじまり――永井久一郎小伝」と題して、国立公衆衛生院の木村正文君がくわしく調べて要領よく紹介されているのを、最近見付けて、わが意をえたりとばかり喜んだところである。このように、日本の明治期の衛生行政活動が統計的・歴史的研究で次第に明らかにされていくのは、喜ばしいことである（10を参照）。

(13) 内海健寿　エッチンゲンの「道徳統計」の構想。統計学、第三八号：五七―八五頁（一九八〇）。

(14) 内海健寿　統計学発達史上におけるジョン・グラント。会津短期大学学報、第三八号、一八七―二〇〇頁（一九八一）。

(15) 内海健寿　ゲオルグ・ハンセンの人口統計論におけるプロテスタンティズムとカトリシズム。会津短期大学学報、第三九号：三三九―三五六頁（一九八二）。

(16) 丸山博　アーユルヴェーダとニイチェ。読売新聞（大阪版）、昭和五六年一二月二一日夕刊（宗教欄）（一九八一）。

(17) 富士川游　医科統計学。医学中央雑誌、第五巻第三号（明治四〇年七月）一―一二頁（一九〇七）（昭和五六年九月刊『富士川游著作集』6：八六―九九頁再録）。

(18) 富士川游　『医科論理学』（淀野耀淳共著、東京・南江堂より明治四四年〔一九一一〕一二月刊、一四七頁）（『富士川游著作集』6：三―八五頁再録）。

(19) 丸山博　富士川游の『医科統計学』『医科論理学』の紹介。医学史研究、第四五号：四三―四四頁（のち昭和五六年九月の『富士川游著作集』第六巻月報八に小稿をかいた）。

(20) （資料）「森鷗外の会」報告――昭和一二―一三年・東北大学――。医学史研究、第四三号：二八―四一頁（一九七四）。この問題については、本稿注(6)のなかの注十二補遺で少々私見を加えてふれている。

(21) 「アーユルヴェーダ研究会」（一九六九―）の機関誌『アーユルヴェーダ研究』第一一号（一九八一年度版）は第三回総会を特集しているが、ここでは、「東西自然観と科学方法論をめぐって――インド・ライフサイエンスと近代科学思想との対話――」が課題にされている。なお一九八二年七月の第四回研究総会の課題は「からだとこころの健康をアーユルヴェーダに学ぶ」ときめられている。ここでは精神病が古くて新しい問題としてとりあげられるであろう。現代の精神科医は呉秀三先生をいかに再生させるであろうか。（一九八二年六月補記）